

ノンフィクション系のテレビ番組における「やらせ」に厳しい目が向けられている。ソーシャルメディアによって視聴者の声が目撃され、そこにあふれる本音から制作者は志向をつかみやすくなったが、その一方で誤解による、やらせの指弾に制作者が萎縮するという悪循環が起きている。やらせは今に始まったことではない。一九九二



竹林 紀雄  
文教大大学院教授

## 「IT時代の「やらせ」と演出

# 映像「読み書き」能力向上を

ズレがあることだ。特に、制作側が「本来の姿」を再現しようとする時に顕著となる。十五年前に出版した『映画は世界を記録する』ドキュメンタリー再考(共著)以来、筆者は述べてきたが、やらせという言葉

のものがズレを招く原因の一つではないだろうか。視聴者側には撮影現場で「誰かに何かをやらせること自体が悪」という思い込みがあるようだ。以前、こんな体験をした。不感を過ぎてからキックボクシング

は演出という職務の根幹である。問題はやらせではなく、なかったことをあったようにしてしまう「捏造」や「本来の姿」をねじ曲げてしまう「歪曲」なのだ。やらせを巡る制作側と視聴者側の認識の溝を埋める切り札の一つとして、情報通信技術(ICT)を活用した教育に期待している。文部科学省が進める

ときに撮影時の時空間を超えて、新しい連続した時空間を生み出すことも知られる。そして、コンテンツとして成立させるにはリサーチ、撮影、編集等のプロセスで取捨選択し、再構成しなければならぬこと、つまり構成や演出がなければ、その世界を描き出せないことを理解するはずだ。さらに、描いているのは空想の世界なのか現実の世界なのか、そしてその境界はどこにあるのかという点にまで、思いを巡らせるかもしれない。その過程で、捏造や歪曲ではなく、現実の表面を映した「事実」にすぎない映像を「真実」に近づけるための演出としての正しい「やらせ」は必然的にある。

### ●「本来の姿」の再現

あらためて、小、中学校での国語の授業を思い出していただきたい。「読むこと」と「書くこと」は表裏一体。これは映像の「読み書き」とも同じである。テレビ番組などの映像は見る側には受動的であり、「読むこと」は「読む」と思われがちだ。だが、大切なことは本当に読んでいるかどうかである。映像を読む能力を向上させることは、書く能力を高めることにもなる。そうすれば、やらせの本来の意味を理解し、捏造や歪曲と区別できるようになるだろう。映像の制作現場が「本来の姿」の再現に萎縮することがないよう、IT時代の新しいメディアリテラシー教育に期待したい。

年のNHKスペシャル「奥ヒマラヤ禁断の王国・ムスタン」で、スタッフに高山病を装わせられた映像などが問題となってきた。たびたび「演出」がやり玉に挙げられてきた。

### ●認識のズレ

● たけばやし・のりお 1958年、福岡県生まれ。84年、日経映画社(現・日経映像)入社。テレビ東京の「ドキュメンタリー人間劇場」など日経新聞グループ各局で幅広いジャンルのテレビ番組の演出や制作を担当。2007年から現職。教育研究の傍ら「ザ・ノンフィクション」(フジテレビ)などで映像作家として活動。日本映画監督協会理事、文化庁芸術祭執行委員。立教大大学院修了。

ングを始めた居酒屋店主の練習風景をジムで撮影しようとかメラを構えた時だ。周囲の練習生は一斉にカメラから逃げた。仕方なく、練習生に「普段通りに練習を」とお願いした。それで「本来の姿」を再現できたのだが、練習生は「やらされた作為的映像」と否定的視しがちなのだ。しかし、制作側からすれば、ある行為を「やってもう」という本来の意味での「やらせ」

「GIGA(ギガ)スクール構想」により、全ての小中学生に一人一台のタブレット端末が配備された。小学二年生の筆者の息子も授業の一環で、自専用の端末を使い、自己紹介映像の制作に取り組んでいる。いずれ息子は撮った映像を組み合わせて、一つの世界を創り出せることに気付くはずだ。シーンを構成するために撮ったカットは、それをつないだ

六月二十四日、香港の「蘋果(リンゴ)日報」が廃刊した。香港国家安全維持法に違反したためである。創業者は既に昨年逮捕。今回は主筆以下、幹部が次々と連行された。ああ、もはや香港に言論の自由はない。かつてのコスモポリタンな自由貿易港は、今

## 大波小波

では冷戦下、恐怖の東ベルリンと化した。ちなみに台湾が西ベルリンである。六月に大阪で「香港インディペンデント映画祭」が

ああ、香港よ

林家威。雨傘運動から一昨年の理工大籠城事件まで、自由解放を叫ぶ学生と、彼らに催涙弾を水平撃ちする警官隊の暴力とが生々しく

シンポジウムにZoomで登壇する監督や関係者も、全員がマスクで顔を隠している。当局によるID認定を避けるためだ。かつてアグネス・チャンに夢中になり、ウォン・カーウアイのメロドラマにお熱を上げた日本人の香港ファンよ。あなたたちはどう思っか。パンダに双子が生まれたからと悦んでいるだけいいのか。(魯)

2021.6.30

わたしは古道具が好きだ。以前、栃木県益子町を訪れた際、好みの脱衣かごを見つけ喜々として購入。両腕に抱えきれないほど大きなかごを抱え、山手線に乗ったことがある。動くカゴはなんでもこんなにも人を魅了するのかもしれないが、縄文人が編んだかごも機能的で魅力的なものが見つかった。

福島県南相馬市、今から二千年ほど前の鷺内遺跡からそれは見つかった。クルミ専用のかごで高さ三十三センチ、横幅二十センチ。中にオニグルミが数百個、ギッチギチに詰め込ま

## 粒ぞろいのクルミ



クルミかご(福島県南相馬市 鷺内遺跡出土、南相馬市教育委員会提供)

れた状態で見つかったのである。よくぞまあそのままの貯蔵状態で発見されたと感心する。

この遺跡では三十二の土坑

(穴の形の遺構)が発掘され、水が湧いたりたまったりしていた。そこでドンクリ、トチノミ、オニグルミ、クリなどが見つかった。縄文人は湧き水のたまった穴に実を入れて水漬けにし、虫を殺したりアク抜きしたりしていたらしい。

前述のことが、クルミ専用だと判明した理由は、同時に見つかった他のかごよりも素材の幅が広く、厚かったからである。体部はクルミがこぼれ落ちない程度に粗く編まれているが、底部分は強度を持たせた編み方に変えていた。クルミを数百個も入れておくため、それなりの重さに

を込めたのではないかと推定。

効率的にアク抜きをした。り、部位によってかごの編み方を変える縄文人の暮らしの知恵はもろろんすいいが、ギッチリ詰め込まれた粒ぞろいの大きなオニグルミに、彼らの気持ちを見たようで心が温かくなった。

(二んだ・あき) 文筆家  
\*次回は7月14日に掲載予定。



56

## 贈り物? かごいっぱいのお気持ち

文化